

卽身成佛研究序説

室 住 一 妙

卽身成佛といふのは、いふまでもなく、我々のこの現實の肉身のまゝに佛となるといふ事である。抑も佛陀とは大自覺者卽ち絶對的理想人格を意味するのである。換言せば、自己及世界、主觀客觀時間空間の一切にわたつて、正しく覺知することであるから、現在の肉身にまつはる生死輪廻てふ自然界の因果律的制約を超越した解脱の境地である。然しかういふ境地がこの現實の下劣な我等の身心に體現できようとは、とても常識では考へられないであらう。さり乍ら佛敎の尊さ、有り難さはそこに無ければならぬ。苦のまゝに諦めさせ、闇のまゝに迷はしめ、そのまゝそれでよいとせば、それは下劣無慈悲な所謂アキラメであつて、覺悟のアキラメではない。地獄の底からでも奮ひ起たしめ、畜生も餓鬼も光りを浴びて淨め、卽身成佛せしめるところに、佛陀の恩徳が尊いのであり、大慈悲のはたらいた所以なのである。

だが果してそれは今、現實してゐるかどうか。

そんなお伽噺みたやうなことは、昔の時代ではともかく科學萬能・人間本位の現代・世界大戦亂の今日、餘りにも馬鹿げた空想的な閑話題ではないか、といふ者があるかも知れぬ。卽身成佛の研究などは、現下の狀勢では全く

時世に對して迂遠極まるやうに思はれる。所謂認識不足を自ら曝らすがやうである。が然し、かういふ時勢であればこそ、又かういふ尊い課題に對してこそ、茲に大いに研究の必要があるのである。

二

私は本誌前號に「純粹宗學の理念とその展開」の中に於て、純粹とはもとより直接に具體的問題を扱ふとは限らぬが、却て何よりも深刻にその本質問題を扱ふものであることを主張した。即ち純粹宗學の理念は、そのあるべき絶對理想に向つてはたらく精神であるから、實例として内外兩向の展開を見て、而も究まる所、一の中樞的本質課題を得るに到つた。そしてそれが眞實である以上は、あらゆる讀者諸賢にも、俱にその研鑽を願ふところがあつたが、然し、遺憾ながら不文微誠の故か、其の後何等の反響にも接してゐないのである。然し、自らは責任上幾分の成果を見て頂き度いと存じて、再び本誌上に尊い紙幅を惠まれしを幸ひ、大方の批判を希ふ次第である。

三

人と生れ來て、醉生夢死はし度くない。さり乍ら單なる學問道樂、知識の偏重も憂の種となるであらう。まして現代は科學時代である。その科學研究の領域方法も非常に廣大複雑である。人生百般の知識經驗研究はこれから古今東西に亘りいよ／＼尨大多岐を極めて行くであらう。限りある人生にして限りなき問題が横はる。今日ありて明日は保し難き無常迅速の世に處して、果して何を爲すべきか。何を爲し得ようか。大きな矛盾ではないか。然し我々はこの矛盾を恐れまい。人生は謎であるとしても、矛盾であるとしても、却て我々は進んでその矛盾に直面し、その謎をその

ままうけいれて解決に當り度いと思ふ。その限り、どうしても一の覺悟を以て出發せねばならぬ。

まづ我々は、自らを環る切實な現實に目をそゞぎ、直視することだ。

生きてゐる第一の自意識には全問題を包容してゐる。我々が生きてゐる限り無意識的にも、無限の時間空間にたり、無盡の聯關にはたらかされてゐる。我々はこゝに現代文化の恩寵に浴しつゝ、一層その嚴確さを痛感してゐる。我々はすでに個人ではない。勿論個人があつて國家があるのでもない。苟もどんな山間僻地にめばえた一草一木すらも、それは民族の、國家社會の歴史の大きな生命なのである。知るも知らぬも、民族として國家として、すでに大きな歴史の運命に支配されてゐる。ある使命のもとにはたらかされてゐる。今日こそ切實に痛感される今日である。新聞にラヂオに現に見聞してゐる。親子兄弟を親戚を友人を知己を……等でなく、この自身をすぐ捧げねばならぬ所の歴史の必然・社會的必然がある。民族の血の當然がある。否その緊急さがある。

四百餘州を吹きわたる我が御稜威のあらしは世界維新の黎明を告げてゐる。是非善惡を問はぬ。論議も思惑も許されぬ。それは現實必至の大きな動きである。かう見るのは、決して大きな時潮に只イージーに便乗したゆゑではなく、それが今如實にある事態であることを見出してゐる。全く朝に夕にラヂオの電波にのつて耳朵をうつ世界の微細なニュースの波動は、我々のみならず、世界すべての人々の一喜一憂をなしてゐる。丁度あの荒浪のたゞ中に、板子一枚で翻弄される水夫たちの感ずる激しい感傷は、もつと痛切に世紀の動搖として、世界すべての人々の心胸をゆすぶつてゐるのである。戦争か平和かそれに拘らず、政治に經濟に思想に産業に文化に等々無限多様の波がめまぐるしい交響をなしてゐる。民族を通して世界に、現實の刹那を通して永遠にはたらしきかけてゐる。それを今、我々は現實事態の一リズムに見たのだ。聞いたのだ。然し考へねばならぬ、悟らねばならぬ。

私は今、偶然か必然か、この世紀の激動の渦にとり残された一の微生物である。かすかな生命である。それに今真理の一斷片を究明しようとしてゐる一學究には、焰々ともへる火として愛がある。真理への愛がある。それが純なれば純なるほど、大きな自覺への憧憬が強ければ強いほど、痛切にこの根本問題の本質的究明を求めてゐるのである。それは單なる個人の安心立命的なことではなく、人生一般・世界一般の問題ともなり得る。その根本が深ければ深いほど世界永遠の生命問題となるのである。ともすれば時流に棹さすこと、銃前銃後の事務に没頭すること乃至それにかゝはりをもつことのみが緊急なのではない。高い天上の星をみつめて孤舟のゆくへを測り定めること、理想と信念の上から國家百般の事態を回轉せしむべきことが、或はより切要なこととなるのではないか。

現在の世界狀勢は全く無條約の中に、道義よりも政策をとる。政策よりも實力に俟つとされる。然し道義とか信義とかは、たとひ一種の政策だとしても、その政策や實力を導くべき、否死生を超ゆべき理想が、第一義諦が求められねばならぬ。一度第一義が輝くとき、全世界がたとひ焦土とならうとも、ノアの洪水に浸されようとも、永遠の生命はかゞやくではないか。眞の自覺、永遠の光、萬邦協和の大道を求めぬのでは、千萬億の大軍も無名の軍となり、不靈の私闘となり畢らう。幾千億の犠牲も浪費犬死となるではないか。戦線一兵の損傷も尊い犠牲、一發の硝薬一頭の犬馬も意義あらしめるには、萬邦協和の道、永遠の眞理が自覺されねばならぬ。斯の自覺、それこそ、我が國が現に拂ひつゝある幾多の犠牲と更に將に來らんとする世界大戰に對して、永遠の生命をふき入れる息となるのである。死か生か、全か無か、闇か光か。今はたゞその大自覺に俟つのみである。

四

往昔、釋尊の説かれた寓話がある。

どこからか飛び來つた毒箭は、ある若者に中つた。醫者はかけよつて抜かうとするのに、その男はをしとどめて、訊くのである。箭の形や色や材料やその出所、製法やその他種々のことを尋ね問うてからにしようといふ。それは、箭の毒が全身にまはり、命危くなるにも係らず、生死無常、人生の解脱に益なき學者の閑葛藤を巧みにも痛く誠められたのである。

學究には數多の課題あり、研究範圍もある。それを單なる興味とか職業意識とか、流行眞似とかで以て左右し便乘してはいけない。我々は民族であらうが、國家であらうが、人間であらうが、一個の個人を殺しては何ものでもない。生々流轉の血は、無常迅速の風の中に消えなるとする燈火に似てゐる。民族のため、國家のため、世界人類のために、その燈明はいよ／＼明かに正大に掲げられねばならぬ。無始劫來の無明の闇をせ負ひ、永恒輪回の淵に臨んでゐる生命を尊ばう。暴風の燈を護らう。毒箭を抜く緊急さで、解脱へ、自覺へとすべてが向はねばならぬ。あらゆる學問も宗教も生活も戦争も産業も文化も、「それへ」でなくてはならぬ。また、「それより」でなくてはならぬ。

更にいへば眞の解脱上の自覺でなくては何ともいへないことである。現實的諸様態の全生活が現在あるがまゝのありやうで濟まされるものではない。が眞の解脱上の自覺の光から照らされた世界のそれではなくては何の意義もない。よし自覺とはいへ、「凡夫の自覺」「我は久遠の凡夫なり」てふ自覺では是、相對的部分的である。絶對的全體的に向ふ向上傾向として前解脱の意味での價値はあり得ても、自他ともに一切が照らさるべき究竟の光ではない。従てすべての世俗的文化・生活・事業に於て、正に第一義的解脱との緊切なる生命聯關をもたぬ放恣な研究や課題やはその存在を許されぬものである。いはゞ、絶對的統制、自覺的統制を要する。かの所謂官僚的權勢からの統制や、世俗的情實や流行の追隨ではない。「解脱への學究」であるにしても、「解脱よりの教學」であるにしても、たしかに、こ

の絶對的解脫境の第一義諦との生命聯關に於てのみ意義があるのである。

五

然らば、その解脫境とは何か、第一義諦とは何かといふ問題となるが、之は簡単に説明し得ぬは勿論ながら、ともかく、それが目的企圖としての把握を確かめてをかねばならぬ。

解脫とは、生死しつゝある現實生命に即して現實的諸制約の繫縛を解脫することである。その表現自體、矛盾的であるが、矛盾と考へる考へ方がすでにとらはれてゐやしないか、といふことは、すでに無常迅速に流轉しつゝある自己の肉體的心理的存在を凝視し内省するとき、直ちに解決されようと思ふ。故に現實の主觀乃至これに連關する客觀界を認識し、そこにありやうの深さに徹しつゝ、さらに永劫普遍の問題を解くべき極地に立つことが、解脫的境地に到るといへるのである。第一義諦とはその極地に立つた自覺の光源であり、光被の世界である。普通の科學、或は哲學とか形而上學なるものが、目ざすのは推し進めて考へれば、自意識的光をたよりてこの第一義諦へ向ふのである。故にその生命聯關をば、普遍妥當性、必然性當然性等といふのであらうが、之なくては學の學たる所以をも失ふこととなる。宗教一般、佛教一般等の教學の性格としては、確かにこの第一義諦・解脫的自覺の境地の體驗實證に連關するものである。それ故にいかなるさゝやかなる學究も、この本質的聯關を生かす限りは、その課題も生き、成果もみるのである。然らずんば、さきの毒箭の形象由來を尋究する内に、自ら毒に斃死する愚人と簡ばぬこととならう。

六

そこである論者はいふ。

その解脱的境地とかは何處に在るのか。第一義諦とは一體何ものなのか。やはりそれらは一種の觀念ではないか。理想ではないか。然らば非實在である。そんなものをつかまうとするのは幻影を追ふものだ。天上の星をつかまうすると同然、痴人の躍に過ぎまい。天上の星は或は方向の指示とならう。理想は憧憬的となり、何等かの基準とはならうが、然し到達できるものではない。又到達できるものはすでに理想ではない。今日の理想は明日の理想ではない。かう考へてこそ理想が、現實の我々には意義があるが、それを急に、直接に把握するとか、實現するとかは、まるでかのどこかの天文學者が、星を觀測して歩いてゐて、溝に陥ちたといふ話を再びやるのだ。迂闊極まるそんな理想論は、たとへ必要があるにしても、刻下の急務ではあるまいか。平和になつてから、世の中が落ちついてから、ゆつくり、研究もし、發表もするがよい。

之に答へよう。

解脱とは單なる觀念ではない。我々が日常想念してゐる泡沫のやうな存在ではない。考へる葦とか云はれた人間の葉末に宿つた露滴ではない。正しい觀念である。全一的に大觀し、信念することのできる境地である。我れ自らを世界を、三世通觀して永遠を觀念できる境地、正しく深く徹底できる境地を云ふ。自然的制約を超え、社會的歴史的歪曲を脱した境地を解脱といふ。眞理とは觀念といへば觀念だが、それはどうでもいふ、或はどうでもなる觀念ではなくして、却て、それとは反對に、どこでも、いつでも、どうしてもそうならねばならぬ法則性原理性を謂ふ。

自覺も觀念であるが、どうにでもなるやうな、その場限りの、いふ加減な思ひつきではない。全くそれらと矛盾的に、どうしてもそうあるべき道理を體達し、絶對的に妥當した、すでに證明も超えた境地である。眞理も、自覺も、解脱も、それはどうでもなるやうな考へ、思ひつきや想像ではない。幻影でも空想でもない。感傷の黄昏に見出され

た星ではなくして、幻影と現實、夢と醒覺、死と生等、を判つ所の太陽である。今現に我々は大地に足して立つ生物である。かくの如く生き、また考へてゐる我々も、深く省みるとき、此の生それ自身、この世界それ自身が、また夢なのではないか、泡沫なのではないのか。「是は醉生でない、夢死でない。眞實なり。」と宇宙的に目を醒ました境地に立つこと、それは實に「どうでもいゝ」ではすまされぬ事だ。頭燃を拂ひ、毒箭を抜く緊急至極、生死一大事の問題である。生死、生死々々とめまぐるしい回轉を永恒につゞけていく、歴史的社會的生の車輪の齒にきざまれていかねばならぬ運命から、脱却し、超躍する。それがたとひ不可能事としても、無殘な鐵の齒と齒の廻轉り合ふ一瞬時、(ギリット車輪の齒にくだかれる運命とも知らずに)雲の間にきらめく月や星をながめ暮らして慰められるやうなそんな生易しいことではないか。

「生死事大無常迅速」

「出づる息は入る息をまつことなし。」

「臨終の事を習うて後ちに他事をならふべし。」とは古聖の金言。

「三界無安猶如火宅衆苦充滿甚可怖畏常有生老病死憂患如是等火熾然不息」何たる痛切眞實な人生觀であらう。

「如來ハ已ニ三界ノ火宅ヲ離レ、寂然トシテ閑居シ、林野ニ安處セリ。今此ノ三界ハ皆是レ我が有ナリ。其ノ中ノ衆生ハ悉ク是レ吾ガ子ナリ。而モ今、此ノ處ハ諸ノ患難多シ。唯ダ我一人ノミ能ク救護ヲ爲ス。」何たる大きな慈悲であらう。絶對的な解脱であらう。また我々にとつては無上の福音であらう。

「我ハ無病無老無死無憂感無穢汚ナル無上安穩ノ涅槃ヲ求メテ之ヲ得、而シテ知ヲ生ジ、見ヲ生ジタリ。我が解脱ハ不動ナリ。生已ニ盡キ、梵行已ニ立チ、所作已ニ辨ジ、更ニ後有ヲ受ケズト如實ニ知リタレバナリ。」

「有ヲ破スル法王、世ニ出現シタマフ」

「今世後世、實ノ如ク之ヲ知ル。我ハ是レ一切知者、一切見者、知道者、開道者、説道者ナリ。」何といふ絶對的な自覺であらう。

「衆生ニ佛知見ヲ開カシメ清淨ナルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ニ佛知見ヲ示サント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ヲシテ佛知見ヲ悟ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ヲシテ佛知見ノ道ニ入ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。舍利弗、是ヲ諸佛ハ一大事ノ因縁ヲ以テノ故ニ世ニ出現シタマフト爲ヅク。」

「毎ニ自ラ是ノ念ヲ作ス。何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入り、速カニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメント。」何たる尊嚴無比な慈願であらう。人類の精神的太陽でなくて何であらう。然らばこの大自覺の太陽のかどやくときこそ世界に意義がある。戦争も、平和も、靈も肉も、産業も政治も文化も眞の價値があるのである。

「世間虚仮唯佛是真」とは聖徳太子の御言葉、單なる讃辭ではなくして、人類に良心の健全なる限り、眞理と理想への熱意のつゞく限り、眞實の絶叫なのである。「篤敬三寶」、「皈命三寶」は切實必至の行動である。

七

又ある論者はいはう。

なるほど、釋迦はさう云はれたであらう。自覺者であらう。また我々もさうあり度いは山々である。然しそれは望むべくして達し得られぬ理想である。たとひ達し得られても、一人あつて二人三人とは無いではないか。人間は人間で

よろしい。凡夫は凡夫でよろしい。「吾は久遠の凡夫なり」「我は底下の衆生、煩惱具足の身」であるから、凡夫たるの自覺、人間としての安心立命が大事である。之が人間的宗教である。

又ある者は主張する。

我々は大日本・神國の民である。凡夫ではない。只の人間ではない。日子である、神である。光輝ある皇國の大御寶である。現人神の御爲めにつかへまつること、天壤無窮の皇運を扶翼したてまつることより外に何の自覺が要るか。何の教が必要か。我々は亡國インドの宗教的影響を脱却すべきだ。今は火急の事態、皇國の本務を遂行する爲めにも煩はしい宗教的異分子を拭ひ去り、淨めつくすことが急を要する。この現實に皇國の本務を盡すことのみが、我々の解脱への道でなければならぬ。それ以外はすべて閑葛藤であり、戯論であり、國賊である。

八

私は今、これらに對して答へる。

實際、火急の本務はやむを得ない。否、やむを得ぬ所ではなく、進んで悦び勇んで立つべきだ。それが皇國の本務として民族のため、祖國のため、延いては東洋永遠の平和のために、世界文化の圓融のために起つべきである。今起つたのである。「即身成佛研究序説」を掲げて起つたのは唯だゞその爲めである。我々がいふ解脱とは逃避的境地ではない。個人的安心立命ではない。人間は人間でよいといふのは自慰的な退嬰的なむしろ子供だましの宗教であつてあの絶大な慈悲公明な宣言をなされた佛敎の眞髓では斷じてない。生きとし生ける者、すべての衆生の根源を衝き、徹底した救済を果すが、全世界永遠にわたる佛陀釋尊の本願である。

なるほど火急は火急でも、そこになほ輕重本末がある。本務とは云つても末梢的眼前的時務のみではない筈。明日、百年の大計樹立こそ一層慎重に心せねばならぬ。實際また刻下の急、戦より急はない。その急にしても武力戦・經濟戦・外交戦、それに思想戦があるが、就中、明日以降層一層の重要性を認められ來つたのが思想戦である。その思想戦にもいろ／＼な意味を見出さなくてはならぬ。第一は武力戦のための思想、即ち忠君愛國的信念にまで高め、鍛錬するもの、世に所謂國體明徴的思想體系である。第二に文化的思想戦であらうか。思想に對する思想、即ち經濟外交内治等諸方面にわたつて積極的にはたらく創意の思想、それがまた外に向つては、共產主義・無政府主義・自由主義・民主主義其他諸のイズムを批判し克服し開顯していくべき、公明正大な世界の光りとなり、悦びとなる所の思想である。それは單に自國の傳統を守り、それに踞踏するやうな小さい日本主義ではない。また支配され、服従し追隨し阿附することのみ事とする、小さい國民主義であつてはならぬ。第三は精神的思想戦。日本はたしかに神國であるが、日本國民のみの神國ではない。神は天照と申せば、全世界光被の天命を有する。天壤無窮の皇運は斷じて極東の防波堤的命運ではない。畏くも、仰せ渡された勅語を拜さねばならぬ。「舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ皇道ニ本ヅクベシ。」「知識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スベシ。」とは正に 明治大帝の天地神明に誓はせ給うた御宣言である。皈依すべきに皈依し、護持すべきを護持する。之が天地正大の公道である。一切衆生を自覺せしめ、安樂せしむる、釋尊の本願に國土を捧げてこそ、眞に大日本の大をなす所以である。

之は思想といふよりむしろ精神信仰である。精神力、信仰信念の絶對的公明正大こそ天地を感動せしむる道である。即ち武力の神に通ずる道は至誠である。文化の神に通ずるも亦至誠である。神に通ぜぬ武力は暴力、神に發せぬ文化は墮落である。それ故に勢をかりてたとひ全世界を征服しても、至誠なく、天地正大の神威を仰がず、佛法を奉ぜぬ

限りは、秦の始皇の亞流となる。我が皇運は斷じてそれではない。天壤無窮の皇運は絶對的解脱境の根源から發する。それ故に神武の威力を現する。又絶對的自覺の光を仰ぐ。それ故に天照の光被に浴し得るのである。

釋尊はなるほど、インドに生れ給うたことは確かであらう。我々と同じく人間である。人間である以上、その自覺は人間としての自覺に即し、そして絶對的自覺永遠の解脱境に達せられたのである。故にその教説はインド地域に限られた眞理ではない。人間には勿論生物國土自然宇宙に遍滿してはたらく生命的大自覺である。それ故に三千年前御入滅とともに消え去る光りではない。人間が自己を深く求める限り、衆生を廣く利益しようと念ずる限り、世界を眞に救はうと努める限り、佛教は益々眞の光輝を放ち、愈々その權威は發揚するであらう。

釋尊の教説は八萬四千とも稱されるほど無盡多岐の法門であるが、詮する所は、所謂法輪を轉ずること即ち、一切衆生を化して絶對眞理を自覺せしめ、光りかざやく眞理の王國を建設することに外ならぬのである。この大地に永遠の光、眞實の悦をもたらさうとされたのである。

「一切衆生ヲ化シテ皆佛道ニ入ラシメントス。昔ノ所願ノ如キ今已ニ満足シヌ。」「我方滅度ノ後ニ於テ斯ノ經ヲ受持スベシ。是ノ人佛道ニ於テ決定シテ疑有ルコト無ケン。」

是れが佛教の眞髓である。あらゆる時代、あらゆる社會に即して之を實現すべく念願し、努力すること、之が佛教徒の本務であり、我が皇國無上の使命でなくてはならぬ。

九

蓋し、佛教史上三千年、日蓮聖人ほど、全佛教をこの見地から、しつかり把握され、絶大の努力をそゝがれた方は

少いであらう。

「彼々の經々と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判ぜんとき、爾前迹門の擇尊なりと、ものの數ならず。いかに況んや等覺の菩薩をや。まして權宗の者どもをや。」とまで喝破された絶對的教權主義の核心は、實に大覺世尊の絶對的生命の潑刺たる血脈よりあふれたものである。あの熱血悲涙の御生涯は唯だその爲めであつた。四格言も、立正安國も國體開顯も、五綱も三秘も要するに是に皈結するのである。

「歲月矢の如し」と、我々が怠けてゐる時も、睡つてゐる間でも、知らず／＼のうちに日月歳星はぐん／＼とめぐつてゐる。七百年の昔「佛法必ず東土の日本より出づべきなり。」と云はれた言葉は、今や全く昨日今日の現實的ニユースに見ることとなつたではないか。

「一天四海皆歸妙法乃至大地を的とするなるべし。」の御言葉も、いつどういふ事が沸き起つて事實となる事か、その時こそ我々の怠慢は恐るべきものとならう。我々教徒はこの赫々たる金文を拜して慄然と畏れねばならぬ。目を醒まさねばならぬ。

今日のこの世界大動亂は何をもの語るか。諸天の催促によるか、どうか。神秘的なことは今問はぬにしても、上述の如く現在最も必要なものが何であるか。百年の大計とまで云はぬにしても十年の小計を考へ見るとき、必ずしも求め易いことではなからう。萬人が萬人同様直ちには納得できないにしても、ともかく我日本の全力を盡して火急に求めねばならぬものは、眞實の平和への道、萬邦協和への大道である。その道の發見、大自覺である。絶對眞理の大自覺によつてのみ、國體明徴も、世界平和も、東亞經綸の大策も解決できる。さし迫つて來るべき世界大戰はもつと／＼深刻とならう。武力にしる、財力にしる、思想にしる、もつと／＼恐しいこととならう。眞理への意志、眞理への愛、

正義への皈依、佛法のための戦にこそ一切をさへげて行く限り、最後の勝利は我らの手に皈す。

「日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず。」「日蓮を敬ふとも悪しく敬はざる國亡ぶべし。」

我々は佛陀大覺世尊の本弟子、日蓮聖人の末弟に列るものは、今までなし來り、今なほなしつゝあるすべてを抛つて佛祖の本懐に直參せねばならぬ。然らずして強權の前に屈し、俗流に流され、追從苟合以て一時を糊塗するは、「寧喪身命不匿教者」の金言に背くもので、城者破城の者となる。

今こそ日蓮聖人の眞の大教は發動されねばならぬ。神聖の教權を仰がう。純粹の權威に服さうではないか。

一〇

現に宗祖日蓮の命脈をうけつぎ來つた筈の宗團が在る。七百年、短からぬ歲月、嚴たる宗旨の確立、相續もあつた筈。宗團には正しく、その目的と方法との具體的提唱實踐があつた筈。

現行日蓮宗法規第一條には、

「諸佛出世ノ本懷最爲第一ノ法華經ニ根據シ、宗祖日蓮釋迦所立ノ宗ヲ開キ、本教ノ妙旨三大秘法(本尊題目戒壇)ヲ宣布シ、末法ノ機縁ニ之ヲ奉持セシメ、以テ即身成佛ノ妙悟ヲ得セシムルヲ教旨トス。」とある。

なるほど、明確な條文、疑ひない信仰である。だが然し、之が現實社會に國家に果して少しでも實現されてゐるかどうか。宗旨を宣傳してゐる人々は數多いであらう。講學研究にいそしむ人も少くない。教育養成にたづさはる人々も隨分とある。古來高僧碩學の頭腦をしぼり、東奔西走して築きなされた宗團はこゝに現在してゐる。現に年々幾十萬の豫算を費し、幾萬の人を動員して、今果して何事を爲し、何事を獲來つたのか。量ではなく質的に、深く内省する

とき、幻滅の悲哀といふか、現實の爲態を見て、我々はつく／＼と嘆ぜざるを得ないではないか。

一一

抑も宗團は、個人社會國家の眞淨化を目ざして働き、即身成佛、淨佛國土、立正安國へと推進し、教導する主體である筈。主體である以上、自らまつ先に實證的に立正安國、即身成佛の宗團であり、その個人がなくてはならぬ。果していかに。過ぎ去つた史的事蹟は今且くさしをいても現實的にはいかに。成佛とは、前にも述べた如く、生ける人格が絶對的自覺の境地に到達したのをいふ。解脱の心境に飛躍することである。必ずしも三十二相八十二種好云云の諸條件は神話的な化粧として、さほど必須條件ではないにしても、成佛が所謂退嬰的なアキラメや、獨暴的なサトリを意味するものであつては、それは全く大して有難い教ではないであらう。それでは俗諺の、「知らぬが佛」とか、「死人を佛様」といふと同斷、以ての外の迷妄であり、邪見である。佛教の眞實の意味は目ざめたもの、自覺・大覺、正覺が佛である。我々は眞實の佛を求める以上、敢えて現實の世界、現實の國家、現實の宗團乃至は現實の自己自身を、正視し直視するものだ。然らば現實の宗團はいかにあるか。現在の我々は何を爲すべきかを求める。

一二

論者はいはう。

宗旨の木領は立正安國である。即身成佛は個人的で宗祖の本懐とはいへない。國家とともに成佛するのが我々の願業でなくてはならぬ。従て、個人の成佛を願ふより、布教宣傳を宗是として一日も早く、一國を教化して、玉佛冥合

の曙を期すべきである。

今答へよう。

若し個人だけの成佛といふものが假りにありとせば、それは我々が問題にしてゐる佛ではない。それは佛教學の所謂佛ではなくして辟支佛である。また個人と國家といふものが、離れぬものであり得ぬことはすでに佛敎一般の定説である筈。立正安國と即身成佛とは、然かく矛盾的對立では決してない。立正安國の中心こそ即身成佛であり、基礎こそ即身成佛でなくてはならぬ。見よ、立正安國論の結文に明確ではないか。

汝早改信仰寸心速皈實乘一善 然則三界皆佛國也 佛國夫衰乎 十方悉寶土也 寶土何壞 國無衰微土無破壞
身是安全心是禪定 此詞此言可信可崇。」

「改信仰寸心」に個人的觀念的信仰に國土成佛の規模を托され、國土成佛の實相の中に、個人身心の安全を保證せしめられてゐる。而も個人的信仰（正信）の樹立の必須條件として、本論の前段に重疊破折されたのは、念佛往生的なアキラメ信仰、野狐禪的獨善的サトリそのものである。私かに聖意を案ずるに、即身成佛（個人的信仰安心）は立正安國の基調をなしてゐる。三界佛國十方寶土、即ち安國は、立正（即身成佛）の原因からもたらされた結果である。立正安國の本因本果をば現實社會的に究明せられたのが、立正安國論の結構であると拜する。

但し、立正とは個人信仰を意味されてゐるが、それは個人完了ではなく、個人社會國家一體としての個人で、個人出發である。要するに即身成佛の實證（はたらき）あつてこそ立正安國が現實するのである。また即身成佛がないならば、何が立正であり、何が安國であるかさへも、その自覺がないではないか。

然らば、「信仰ノ寸心ヲ改メテ實乘ノ一善ニ皈ス」とは如何にすることか。これも我々宗徒には一般に分り過ぎて

あるほどであらう。

所謂唱題成佛・受持成佛・信心成佛と稱される。唱題とは初心よりの行についての立言で、その主體的態度は信心である。受持とは初心後心の信心相續とその擴充である。要するに、即身成佛は題目に對する絶對の信心、皈依によつて佛果を成ずるといふ立て前である。

一三

我々は深く省みよう。我々は信仰々々とは口癖に云ふ所であるが、實際我々は宗祖の教へられるやうになしてゐるのか。宗祖のやうにやつてゐるのかどうか。信心第一と稱し乍ら、日々夜々に營むところ果して何が第一となつてゐるか。唱題成佛とてなるほど日夜に題目は他人の迷惑になるほど唱へてゐる。然し果して成佛の實がどこに擧つてゐるか。我々の内心に省みよう。我々の宗團を觀察しよう。實際我々は何を措いても、この事態の核心を究明すべきではないか。

いかに成佛の實ありや。どこに安國の證ありや。あるとせばいかに。どこにないとせばいかに。何故にないのか。若しも即身成佛の實なしとせば、それは、成佛の眞因たる信心、受持が眞實でない爲めであるか。或は又、信じてゐる所の妙法そのものに成佛の種子がない爲めであるか。何れかである。信心不徹底は我等の方の責任であり、又所信の妙法に利益の實がないならば、それは唱導された宗祖の責任である。即ち宗祖は有因無果の邪宗門の宗祖となる。かの往年、鎌倉街頭に絶叫された四格言はそのまゝ、地獄・天魔・亡國・國賊と自ら浴びる格言とならねばならぬ。我々の信心不實は、自ら成佛得脱の否定はをろか宗祖にこれほどの疑惑を投げかけまじき恐さへあるのである。それ

に反して、我々の眞實の信心（純粹徹底の信心）によつて、宗祖の眞面目は顯はれ来る。たとへ、宗祖が虚偽者であつても、虚偽者なりと證明できよう。大いにその邪法邪宗門を責め撃つことができる。眞か偽か、實か虚か、正か邪か、信心の徹底によつてのみ、即身成佛・立正安國の問題は解決できる。

一四

純粹宗學の根本方針は當然、之を目ざしてゐなくてはならぬ筈であるが、然し現在のところ、確たる方法、目的、課題等も甚だ曖昧模糊たるやうに認めざるを得ぬ。従て宗門の根本安心に至ると甲論乙駁、宗門行動は泥合戦か支離滅裂。之が果して即身成佛を宣傳する宗門であらうか。立正安國が布教できようか。今や非常時は急迫してゐる。皇國日本は未曾有の聖戰を遂行してゐる。國民精神總動員！ 政府の命令一下、宗教家佛教徒二束三文にたがねられて活動してゐる。念佛も、題目も、彌宜も釋子も、ともに銃後の任務を授けられてゐる。だが然し、少くも佛教家殊に我が宗徒は、事變の眞相聖戰の意義を把握してゐるかどうか。その眞相・眞意義をつかまらずに權勢の下、その命令に盲従するだけで精一杯なのではなからうか。批判の遑も許されず、さりとて意見の持ち合せもない。たとひ、あつても進言の氣魄はない。また、たゞ今國策戰に參じ防共思想戰に狩り立てられつゝあるについて見ても、教家一般は何ものを目ざしてゐるのか。かの唯物主義か、獨裁主義か、はた又共產制度か、そも／＼何を正とし、何を是として標準を立ててゐるのか。皇道精神の何ものを持てゐるのか。佛教精神の何をもつてゐるのか。いかなる大乘的を實踐してゐるのか。單に政府の命令からだといふだけでなく、軍機・策戰の必要からでなく、民族的政治的方便でなくして、若しも教家にとつて觀念的優秀な學問あり、修養があり得たならば、もつと高度の理想が立て得ぬのか。道義に目ざ

めぬのか。方法がないのか。思想戦上、やうやくにして識者間に般若の智劍の要求を訴へて來たにしても、それは近い將來一層痛切な點となるであらう。

かの往生淨土の念佛宗の王法爲本とかいふのは全くの矛盾、ゴマカシである。禪宗の態度も教權の實なきもの。眞言密教の護摩の焰は却て興國の邪魔ではないか。解脱を即身に體し、大覺を肉身に開かうとする我宗徒は、眞正の菩提心を奮起して立たねばならぬ。眞正の菩提心の發動するところ、時勢權力に迎合した態度はとることできぬ。世界の動亂を前にして半睡の古き概念遊戲に没頭できない筈である。

今こそ純粹宗學のみの有つ精銳なる白刃を天日の下に揮つて、即成の實證を開顯すべき秋である。

一五

世界中すべてのものが即身成佛を目ざすべきである。況んや、その本家本元の我宗に於てをや。即成に向つて邁進するとき、宗門の精氣旺盛し、國家も安泰に興隆する。今この目標に精進せぬからして、あらゆる部面が混沌濛々として衰微し、慢性的重患となる。

布教々々といふが、口先だけの布教では人はをどらぬものである。布教には第一權威が必要だ、絶對の權威に本づく確信だ。確信のない布教、權威のない布教は自體矛盾である。權威ぶつた布教や、裏腹の宣傳は笑止千萬の藝に過ぎぬ。即身成佛とは究竟の確信であり、絶對の權威である。布教も宣傳も要らず、即身成佛は論より證據に、一切を解決していく。幾多の宗論など、口角泡を飛ばしても、口舌三寸の勝利で終るのでは、戲論となり畢る。即身成佛は實に證據中の實證である。即身成佛者が一人でもあれば立正安國も四海歸妙も着々と進展していくことは確である。

この未曾有の時局に際して、我々は眞に何をなすべきであるか。

それは即身成佛によつて明確となる。「天晴レヌレバ地明カナリ。法華ヲ識ル者ハ世法ヲ得ベキカ。」とあるやうに。戦争が始つた。金が要る。物質必要。それ梵鐘も献納せよ。献金取次の托鉢もやらう。敵國降伏の大祈禱會。戦傷病者の慰問もせねばならぬ。戦死者には葬儀、葬儀にも神式と佛式とで争はねばならぬ、占領地域には若干の宣撫班の派遣等々。さかんに多忙を極めてゐる。それ故か、目は少しも内に向けられてゐない現在である。

だが然し、何かの機みで、内心に向けられたらどうであらう。佛教徒として考へたら。そもくこの事變の勃發、その最深の原因はたしかに佛教徒の怠慢ではなかつたか。それは今ともかくとして、すぐ次に來るべき高度の對支文化工作、對世界の思想戰への準備。第二第三の排佛棄釋、いよく深刻とならう。佛陀釋尊を排斥されてどこに神聖があるか。宗祖の御遺文を不敬よばはりされ、法界獨一無比尊重の本尊中勸請の國神を批議されつゝ、どこに立正があるのか。之は實に我々宗徒全般の責任であると思ふ。その上、神官・神道學者の攻勢も猛烈とならうが、さりとて、單なる思ひつきの神佛妥協的思想では神佛への冒瀆である。こね合はせの神佛習合の教學では、神道者は勿論國民を偽瞞することとならう。また怪しい神憑りのやうな神道論や國神信仰では識者の物笑ひとならう。これらに對して宗祖は何と仰せられるか。神を批判し、佛を論議して、同異勝負を決せんとする、第一我々にその權能があるのか。愚劣な俗吏の前や、サーベルピストルの前に腰をぬかすほどの者どもが、却つてやり度がる事である。敢て神佛の本迹同異を眞に知らんと欲せば、「神と成るべし」、「佛となるべし」だ。

我々は今、非常も非常、内外絶大な危機に生きてゐる。何といふ深刻な雄大な歴史の一點に立つたのだらう。本佛釋尊の告勅、宗祖の法命をつがうとする者である以上、この今日一日の生命は、重責も重責、一大重責をせをうて生きてゐるのである。何を以てか、「世尊ノ勅ノ如ク、當ニ具サニ奉行スベシ。」と申し得られよう。

なるほど、宗制の改革も緊急、布教も必要だ。國內布教も、國外宣傳も多忙とならう。學問の研究も大切だ。然し乍ら、何よりも緊急で須要の一大事は、宗命に對する覺悟である。自信確信である。正大な信念、堅確な信力である。但しその正大も堅確も單に個人的な觀念的なそれでは何の用にも足らぬことはいふまでもない。國家的に世界的に宇宙的に正大であり、堅確でなくてはならぬ。でなくては、とても、さしせまつてゐる内憂外患に對し得ぬであらう。

現代では、まさに佛教の眞偽が問はれてゐるのである。眞價である以上、學問的理論で證明することでは埒明かぬ。雄辯廣舌で煙にまくことでも、手品のやうな奇蹟を示すことでもない。佛教での眞價は、佛教の究極目的を實現することである。即ち人間が佛となること。而もすでに出來上つたのを示すよりも、現實的に、その人間が此の佛といふやうにである。然る以上何の排佛があらう。何の論争が要らう。戦争があらう。

天にはたゞ一つの太陽が輝いてゐるではないか。そのやうに世界中、大自覺の光明を仰ぐであらう。地には眞理によりて統治します聖皇にいだかれて、萬邦協和百姓昭明も、立正安國婆娑即寂光も自づから運り來る勢とならう。

一八

扱て如上私は甚だ縷々冗々と、現時局下の各方面から、「即身成佛」の切要を論及し來つた。従つて、この即身成

佛は佛教の究極目的であるだけに、輕々に論議し得べくもない事であらうが、いかなる困難があらうとも、現實社會國家世界が深刻に要求してゐることであり、歴史的當然からの課題である以上、閑却できないものである。一般宗教家も佛教徒・佛教學者もひとしく之に努力せねばならぬが、特に吾宗徒は舉つて之を目的として信行し、學者は専ら之に精銳なる頭腦を集約し、究盡していかねばならぬ。毒の箭を抜くやうに、親が子を水火の中から救ひ出すやうにはげまねばならぬのである。單なる理論的考證や、概念遊戲や、法義的莊嚴の追はないのである。宗派的執情や獨善的慳悋を一擲して、現實國土世界の靈活のために、人類救濟解脱のためになす本質的聖業として覺悟するものである。

それ故に今の標題も、とかく論議的意味にとられ易い即身成佛論の研究とはせずして、即身成佛の因果並に實證に關する研究との意圖から、「即身成佛研究」の序説とした所以である。

一九

斯の研究に際して我々が今立つ場合は、いふまでもなく純粹宗學である。或ものは難じていふかも知れない。純粹宗學的立場といへば、それは古臭い教權宗學ではないか。現在の學界の趨勢に逆行するものではないか。眞の公正嚴密を欠くものであらう。現代は宜しくまづ、文獻批判的方法によらねばならぬ、といふであらう。

然し、我々は敢えて批判文獻の方法は公正ではないといふのではないが、それはなほ、餘程注意しないと末梢的になり易く、また迂遠になり易い。そもそも、その文獻を批判する場合でも、又いかなる資料によつてそれを生かす場合にでも、主觀的にはたらく睿智はどこから得るか。人間の常識的範圍に踰踏した觀念で見たり、測度したり、判定

することには、そこにすでに大いなる疑惑があるのである。成佛の意圖、佛陀への自覺がそこに一層要求される。かうなるとまた循環論法に陥つて二進も三進も進めなくならうが、幸ひ、我々は、吾が日蓮聖人の學的態度、その信仰的態度、その實踐的態度に於て、全く一貫した睿智・絶對的自覺の閃きを認める。而もそれが一生を通じて果された事業成果に見るならば、その歴史的社會的關聯のうちに、我々はむしろ神秘的な天命を感得せざるを得ないのである。それは只今、論證の限りではないが、ともかく純粹宗學はかうした偉大な人格性、我々の目的するに格好な先驅者であり、指導者である人格性に出發すべく立つものである。日蓮聖人自身も亦かうした配慮確信決意から出發されたる以上、現在の我々はまづ、公正さを學ぶ意味からしても、嚴密さを鍛鍊する意味からしても、現在の諸佛教學者との研究方法態度以上に、純粹宗學的立場が一層徹底してゐると信ずる。我々はこゝでも亦主張する。斯の研究は、單なる人間的に踞踏した頭腦のもてあそべる理論を求めてゐるものではない。有限なる此の人間理性を極度に淨化し、鍛鍊し、徹底して、神性化し、佛陀化し、絶對的睿智、大自覺を成ぜんとするものである。むしろ、執らはれた常識的識域を突破してすゝむ所に我々の熱意が集注する。さきにも觸れたやうに、日蓮聖人ほど佛陀の本懷を、大義名分的に現實的に主張し發揚された方はない。従つて即身成佛・立正安國・娑婆即寂光の大施は、三國佛教史上、大聖人を最中の最とするのである。

それ故に、「即身成佛」の研究に於ては、先づ第一に日蓮宗純粹宗學的關門から入らねばならぬと信ずる。

二〇

また論者はいふであらう。佛教を學ぶには何より先きに、宗派の經典とか宗祖派祖を研究するよりも、第一の教主

釋尊の歴史性から始めねばならぬ。即ち、根本佛教より研究すべきであると。

一往の道理である。よく考へて見よう。直接に釋尊に接するには、いふまでもなく時代國土風俗等非常の懸隔があること、文獻的にはその確實を期し難い諸の困難があるが、之は現代聖世の恩澤、學界の業績からして、かなりの道は開拓されてゐる。

が然し私は、前節の諸理由は、必ずしも、我々が日本人であるといふ意味でなく、宗派的感情からでもなく、我々自身の公正嚴密なる態度を鍛へるといふ意味からして、あえて根本佛教的釋尊研究をも第二次にさし控へ先づ純粹宗學の立場に立たうとする。但し當然、純粹宗學中樞問題の進み赴くところ、溯源的には必ず、根本佛教的佛陀の史實、成道の始終、内證的心境等に關する研究が求められるであらう。のみならず、宗學的理念の發動には、その補助的研究領域として、根本佛教は勿論、諸大乘教の成佛論、佛身論、淨土論、人生觀、世界觀、宇宙觀等の研究も要求される。特に眞言密教における即身成佛義、その教相・事相等より中古天台等の論題的研究等、廣範圍の研究には欠くべからざるものではあるが、それはその必要に應じてとり上げて遅くはないと思ふ。

以上の如く、あくまでも研究のための研究ではない。さりとて名利權勢等の爲めにするものでは勿論ない。眞理のための研究ではあるが、その眞理も成佛のための眞理である。

絶對的自覺をば、この現實的我に於て體達せんとする熱意が、研究の態度方法範圍等一切を規定すべき力である。

二一

なほ附け加へて、近世乃至現代の宗學界に於ける趨勢を論じ、即身成佛論の研究業績を吟味し批判した方が、如上

の趣意をば明確する便宜でもあらうが、然しさして緊急とも謂へない。で私は、序説は此れ位に止めて、次に本論として、日蓮聖人の全教學から見た「即身成佛」なるものを究明し、そこに理論的・實證的乃至は生命的な教權の根源をさぐらうと思ふ。さらにそこからあらゆる弟子檀那への教誡、現在未來への聖慮、或は日本と世界との聯關、或は聖人と教主釋尊との本質的血脈等、根本教學全般の組織と體系を企圖できようと信ずる。我々信者行者學者は、その分野に當り、實際上の活きた教示利導を仰ぐに足ることとなつて、始めて純粹宗學的意圖はその緒に着くのである。申すまでもなく、之は一人一家の私功を競うてなすべきでなく、虚心淡懷、恭謙熱誠、互に切磋琢磨し大法の興隆活現を祈りつゝ、成就することである。

仍て謹んで、本文中多大の蕪辭非禮を咎めず、その切要する意圖を汲み、教導に吝ならざらむことを希ふ次第である。